

根本正顕彰会会報第6号

平成10年9月30日

第6回研究例会の報告

9月20日(日)午後2時から4時まで那珂町中央公民館2階講座室で開かれ、16名が出席しました。

後藤副会長の司会で議事が進められ、会長あいさつのあと次の事柄が話し合われました。

1. 除幕式と第2回定期総会の準備について

案内状、除幕式と第2回定期総会の次第(前回発送)、第1年度事業報告と、第2年度事業計画(同封してあります)、決算と予算について討議し、除幕式と総会の準備内容を確認し、事業計画にビデオの編集と紙芝居の作成を追加しました。

2. 『なかいきいきフェスタ98』に参加し、11月21(土)、22(日)、23(月)

日の3日間那珂町中央公民館で根本正についての展示をすることについて

昨年はなかなか塾が参加し、根本正についての展示を行っており、その中心メンバーが顕彰会の役員になっているので今年も参加したいということになりました。昨年同様3日間展示するため、11月3日の那珂総合公園ではなく、21～23日に中央公民館で行うことにしました。今年は展示内容を昨年より充実させたいと思います。

3. 11月7日(土)に実施する予定の視察旅行「根本正ゆかりの地を訪ねて」について

行事広報等委員会委員長の遠藤さんが東京の訪問先を事前に訪れて、打ち合わせその他の準備をして来られたので、遠藤さんから日程と訪問先について具体的な話がありました。(訪問日は後述の理由で11月7日に決めました。日程と話の内容は後述します)

4. ビリングス家とバーモント大学の根本正関係の資料入手についての報告と披露

アメリカにおられる根本喜代寿さんのお嬢さんと根本表さんのご令息のお骨折りで、ビリングス家とバーモント大学にある根本正関係の資料が東木倉の根本さんのところに送られてきました。ビリングス氏に胸像を贈ったとき、これに付けた根本正述のビリングス氏の邦文と英文の伝記やバーモント大学名誉博士のベティ バンデル女史が多分20何年か前に書かれたと思われる「世界は一つのシングルルームになりつつある：バーモントと日本における根本正の歳月」という4ページ半の英文の論文やビリングス家とバーモント大学について書かれたカラー印刷の見事な本とパンフレットも含まれておりました。一見の価値があります。研究例会でも出席者の皆さんにご覧いただきましたが、総会のときもお借りして皆さんのご覧に供したいと考え、根本さんのご了承を得ました。

なお、ビリングス氏の邦文と英文の伝記、バンデル女史の論文、ビリングス家の豪華な紹介書やバーモント大学の紹介書に載っている根本正についての記述は柏村がコピーしましたのでコピーを取りたい方にはお貸しします。

5. 町内の各戸に配布するチラシの案「那珂町が生んだ根本正という代議士」

(4枚の原稿と2枚の原稿…作成者 柏村) についての検討のお願い

(8月23日の第5回研究例会で行事広報等委員会から各戸配布の提案がありましたが、時間がなくて全体で討議できませんでした。

私(柏村)は時機尚早と考え、そのむね委員の何人かにお話しました。しかし、皆さんは大変熱心で「11月中にぜひやりたい」といわれるので困惑しました。町内の各戸に配布するには準備不足と考えたからです。「根本正は偉かった」というだけでは、「ああ、そうですか」で終わってしまう可能性が高いと考えたからです。

人びとにアピールするには「根本正の今日的意義」と「その精神を生かすためには今何をすべきか」という論議が必要ですが、まだそれが行われていません。しかし、どうしてもというのであれば、まだ時間があり、総会を含めて討議できる機会があるので、とりあえず論点を先取りした原稿をつくり、検討していただくほかないと考えました。

はじめ、A3版表裏ということでしたのでA4版4枚(A3版表裏分)のものをつくり、見てもらいましたが、「これはやはり長すぎる」といわれたので、その半分のものもつくってみました。「長くてもこの方がよい」という人もいますので両方を出席者にお配りして検討をお願いしました。その後白石孝良さんから原稿を頂戴しました。「柏村の文章は硬いので、一般の人にも関心を持ってもらえるよう考えて書いた」といっておられます。

どれにしたらよいか、皆さんに検討していただきたいと思っています。

皆さんに検討していただいたものを総会で全員に配布し、全員からご意見をいただいてから配布するのがよいと考えています。

このようなことは何回もできることではないので慎重を期したいと思います。ただ、マンガ入りの印刷物ができれば「こんなものができました」といって配布できるだろうと思いますが、同様の印刷物では「またか」ということになるでしょう。なお、9月4日の行事広報等委員会でも同様な説明をしてこれらの原稿を出席者に配布しておきました)

行事広報等委員会報告

9月4日(金)午後7～9時に那珂町中央公民館2階和室で行われました。

議題は全戸へのチラシ配布、東京視察旅行、各種団体への働きかけ、アンケート、小冊子の作成…等々当面する問題について話し合いました。

全戸へのチラシ配布(町報を配布している世帯が12000、実数1万4千何百?)

A3版用紙は白で1枚1円26銭+消費税=1円32銭3厘

カラーで1枚2円26銭+消費税=2円37銭3厘

これを町報と一緒に配布してもらおう(毎月1, 11, 21日に配布)。

チラシを見るのは一般に5%(600人)、興味を示す人は1%(120人)、本当に興味を持ってくれる人は0.5%(60人)か?、という話が出ました。「根本正という人のことで動いている団体がある」ということを少しずつでも知ってもらえればよいと思います。

PR活動が成功するには、「1. 興味関心、新しさ、希少性 2. 重要性（時代を察知） 3. 利害性が必要である」という発言がありました。チラシにこのような内容が盛り込まれるか、大変なことだと思いました。

東京方面視察旅行

国会、憲政記念館、安藤記念教会、青山墓地などが候補地にあがりました。日本禁酒同盟（三鷹市）は遠くて無理であろうということになりました。遠藤委員長を中心に役場のバスを利用させてもらえるよう交渉し、視察先との折衝など準備をすることになりました。

各種団体への働きかけ

「役場内に“ネットワークなか”（担当は女性行政室）という組織があり、その中には那珂町地域女性団体連絡会（もとの婦人会）、食事改善推進連絡協議会、商工会婦人部、交通安全母の会など18団体が加入している。顕彰会の会員や会員の奥さんにはこのような会に入っている人が少なくない。このような人たちにお願いして顕彰会への理解と協力が得られるよう周囲に働きかけてもらってはどうか」という新しい提案がありました。ただ、このような場合、顕彰会が「根本正の今日的意義」と「その精神を生かすためには今何をすべきか」という論議をしていないと、他の組織の人びととの接点がつくりにくいのではないかと思います。

会員全員へのアンケート調査

「研究例会への出席者数は会員全体の2割前後である。したがって、少数の者が空回りしている可能性もなくはない。ときどきアンケート調査をして“声なき声”を知る必要がある」という意見がありましたのでアンケート調査をしたいと思います。遠藤委員長がアンケート調査の原案を提示し、意見を求め、修正しました。調査用紙は総会に持参していただき、欠席者には郵送していただくということになりました。

根本正や顕彰会の活動状況について述べた小冊子の作成について

「10ページ程度の小冊子をつくって、役場や、公民館、駅、郵便局、金融機関、スーパーなどのコーナーにおいてもらい、持ち帰り自由としてはどうか」という提案です。

その中に「さらに詳しい資料がほしい方は会長か事務局長にお申し出ください」という文言を入れ、電話番号や住所を載せておけばよい。このような人は関心が高く、入会する可能性が高いと思われます。駅に功績を書いた掲示板を立てては、という提案もありました。

第3回理事会の報告

9月6日（日）午後2～4時 那珂町中央公民館2階講座室で開かれました。

主な議題は、除幕式と総会の内容の確定、諸準備、役割分担、第1年度事業報告、第2年度事業計画などが詳細に話し合われました。出席者9名

加藤純二先生の『根本正伝』近日再版の予定

出版社の倒産で1年ほど出版不能になっていました加藤先生の著書が新しい出版社から再版されるという朗報がありました。

ただし、価格が400円上がって2000円+消費税=2100円になるそうです。

黒沢止幾子(ときこ)顕彰事業視察報告

9月13日(日)午前、遠藤、海野徹、柏村の3名で東茨城郡桂村を訪れ、役場の前にある歴史民俗資料館で展示を見たあと、山間地にある生家を訪ねました。

黒沢止幾子は文化年間に生まれ(根本正よりも40歳ほど年上)、現在の金砂郷村の嫁ぎましたが、夫が死んだため幼子を連れて実家に戻り、手内職や行商をしながら学問に励み、寺子屋の師匠になります。54歳のとき、安政の大獄で徳川斉昭が幕府から蟄居を命ぜられると、斉昭を救うために単身で京都に赴き、朝廷の力を借りようとしたが果たせず、捕えられ、籠に乗せられて東海道五十三次を江戸に送られました。その後許されて故郷に戻り、子供たちに学問を教えていましたが、明治6年には小学校の教員になりました。女教師第一号です。その後明治23年83歳でなくなるまで塾の教師を務めました。

桂村商工会のメンバーが中心になって結成された「ニューモラル21」が顕彰事業をはじめ、生家では5代目に当たる画家の黒沢清一さんがアトリエを開放して展示室にしています。古文書や遺品とともに護送される間、宿駅で籠から下ろされたとき詠んだ54首の歌が清一さんによって浮世絵の宿駅の風景の中に書き記され、展示されています。

歴史民俗資料館では幅1間ぐらいの壁面に人物と業績を書いた2枚のパネルが展示され、ボタンを押すと4分間、テレビ画面にアナウンス入りでビデオ画面が表示されます。

これは大変効果的な装置だと思いました。何万円かのできるという話なので早速検討してみたいと思います。海野徹さんがその後このビデオを録画して来たそうですので、一緒に見てみましょう。清一さんの展示室のショーケースは貴金属売り場のものを安く買い受けたものだそうです。立派で頑丈で盗難に強いと思いました。

東京方面視察旅行「根本正ゆかりの地をたずねて」の日程決まる

9月21日(月)午後4時、遠藤、柏村の両名が役場に小宅町長を訪ね、役場のマイクロバスを利用させていただきたいむね依頼しましたところ、「日曜日は運転士の勤務の都合上難しいので土曜日(11月7日)にしてください。新しい方のバスを使いましょう」と快く受け入れられ、担当の財務課長さんに指示されました。国会見学は国会議員の紹介が必要なので「梶山先生の事務所にお願ひしましょう」と電話を入れ、紹介状を書いてくださいました。早速財務課で申し込み手続きを済ませ、常陸太田市の静山会事務所を訪問して国会見学のお願いをしてきました。このように短時間で終わってしまいました。遠藤さんの予備調査の報告と日程…根本正廣さんご夫妻と角谷貞夫さんにお世話いただきました。根本先生の孫(次女のご子息)に当たる安藤記念教会長老の角谷貞夫さん(会員)から『安藤記念教会七十周年史』をいただきました。安藤記念教会は日本禁酒同盟とともに根本正にとって政治的にも精神的にも拠りどころであったところです。根本正の側面を知る上で貴重な資料です。

去る9月17日(木)「根本正ゆかりの地(東京)」視察研修準備のために視察予定先を見学しましたのでご報告します。(国会議事堂は時間がなく見学出来なかった)

(1) 安藤記念教会

教会は、伊達家下屋敷のあった港区元麻布2丁目・仙台坂上の高台にあり、ツタがびっしりとからみ、ステンドグラスの美しい、建設当時の面影を残す素敵な教会です。

付近には、有栖川宮記念公園(元南部藩下屋敷)、アルゼンチン・パキスタン・フィンランド等の大使館があります。

当教会長老の角谷貞夫氏(根本正の孫・顕彰会会員)に案内していただきました。

この教会は、1917年(大正6年)紀元節(2月12日)に、安藤太郎が、「亡妻が年来の遺志*により」自宅を寄付してメソジスト銀座教会講義所として設立したものです。

* 太郎と妻文子は、1912年(明治45年)に根本正を証人として ① 財団法人安藤教会を設立する ② 太郎及び文子は、所有する不動産を、死後、教会に寄付する ③ 一方が他より先に死亡した場合は、他の者がこれを相続し、教会に寄付する という内容の遺言書を作成した。

講義所設立賛同者の筆頭(牧師を除く)は根本正で、発会式では祝辞を述べています。政友会重鎮のクリスチャン政治家・静岡県選出の衆議院議員(後に貴族院議員)で未成年者禁酒法の強力な支持者である江原素六も賛同者に名を連ね、同じく発会式で祝辞を述べています。

根本と安藤の出会いは、ハワイ総領事であった安藤が1888年(明治21年)に「ハワイ島日本人禁酒会」を設立したことを知ったバーモント大学在学中の根本が、“アメリカにいる我々がかくの如き意思堅固な人々のため、その新聞記事のため、非常に肩幅が広がった”として直ちに安藤に手紙を書いたことに始まります。

2人は帰国後も共に禁酒運動を行い、1890年(明治23年)には東京禁酒会(会長 安藤、副会長 根本、同 美山貫一)を設立しています。

教会の礼拝堂には、安藤の禁酒のきっかけとなった、ハワイ領事館の裏庭で割られた酒樽の板で作られた「花台」が安置されており、牧師館記念室の壁には、安藤が徳川幕府の海軍時代から生涯を通じて恩顧を被った榎本武揚からの書と安藤から根本宛ての書が掲示されています。

角谷さんに11月の視察研修の際のご案内をお願いいたしました。また、角谷さんからは、「安藤記念教会70年史」をご寄贈いただきました。

なお、視察研修が11月7日(土)の場合は、教会で結婚式が行われるために午後3時以降にお願いしたいとのことです。

(2) 青山霊園

根本正廣氏（根本正の孫・顕彰会会員）に案内していただきました。

根本正は、1933年（昭和8年）1月5日東京の自宅で死去しました。享年83才でした。葬儀は日本国民禁酒同盟によって行われ、安藤太郎が眠る青山霊園の中の外人墓地の隣接地に埋葬されました。森永製菓の創始者森永太一郎の墓の西側にあります。

青山霊園は1874年（明治7年）に日本初の公園墓地として開設されました。

27万平方メートルもある園内には、縦横に走る桜並木を始め、武蔵野の面影を留める樹木が生い茂り、落ち着いた雰囲気を保っています。

明治維新の功労者や文学者・科学者・芸術家・政治家等の著名人の墓所が数多くあり、墓参者はもとより歴史探訪の見学者も多く見られます。

郷土が生んだ偉人根本正の臨終の様子を加藤純二著「根本正伝」では次の様に伝えています。

昭和7年の年末、翁は弱った体をベッドに横たえていた。孫たちは正月にスキーに行くのを楽しみにしていた。長女夫婦は翁の健康を心配したが、正は「ぜひ孫達をスキーに連れていくよう」命じ、翁は徳子（妻）と二人だけで正月を迎えた。

4日、強い胸痛に襲われた正を見た徳子は、医師や美山貫一牧師、家族に連絡をとろうとした。正は徳子に「お前だけいてくれればいい」と言い、連絡するのを禁じた。徳子は夫が死を覚悟しているのを感じて、客間の藤田東湖の『弘道館記』の拓本が掲げられている下に床を作り、正を寝かせ手を取った。

「長い間、わたしを助けてくれてありがとう。わたしのような勝手気ままな夫はいなかった。」徳子は言った。「あなたが家を出る時は何時も今日が別れの日かと案じていました。それがお互いこんなに長生きして、あなたはいろんなことを成し遂げましたよ。一緒に暮らせたことを感謝しています。」「洋行が長くなったときはすまん。美倫や正次や直子のところへ行って、今度はお前を待つことにするよ。孫と出来るだけ長く暮らしてから来るんだよ。皆にお礼を言ってくれ。」そう言って目を閉じた。

1月5日の明け方、朝日が窓から差し込む頃、徳子一人に見守られて満足そうな笑みを浮かべ、根本正は永眠した。枕元には、聖書と自分の訳本『日々の力』が置かれてあった。

(3) 小石川後楽園

プロ野球のメッカ「東京ドーム」に隣接して7万平方メートルの庭園（国特別史跡・特別名勝）がある。水戸藩初代頼房と2代光圀が造園させた小石川後楽園である。

神田上水から引き入れた池泉を巡る回遊式庭園で、初代の日本趣味と2代の朱瞬水の意匠を取り入れた中国趣味が楽しめる「オアシス」です。

以上